

於其間者多、冶遊之子必携狎妓、往鴛鴦願步、迷蝶雙飄、衣同其色、以照驕奢、土俗之習不止、幼穉少年、爺亦步、婆亦顛、連僧連祝、恙心也似、莫不入夥、貧不能爭美者、俗而臂袂、娑僧而瓢長袖、或負筠籠、或被藁薦、奇怪百出、箇々取笑、那邊舞罷、這邊謳起、矜色取重者、坐宴不出、酒酣矣、熬不過、亦投袂而起、七十四橋將蹋頓、三十餘坊危顛覆、

〔諸國盆踊唱歌序〕此さうしは、寛文の頃、後水尾院諸國に勅して、盆踊の唱歌を集め給ひしものなりとて、今より二十年ばかりさきに、友人の許よりかりえたりしが、其刻は何のこともなくて、寫しと、めず、其のち見まくほりすれども、彼友も亡たれば、更にせんすべなかりしが、今又不意此寫本を得たり、御撰なりといふが、たゞいひ傳ふるのみにて、その虚實は不知、

いたこ出島云々の歌は、むかし見しさうしには無し、後人の書加へしものなるべし、そのほかもなほ近くおもはるゝ歌あり、よく味ひて新古を分つべし、

文政乙酉六ノ朔

柳亭種彦

透火

〔花洛名所圖會東山〕大文字熊谷直恭通、云、毎年七月十六日の黄昏に、洛東淨土寺村如意嶽の山上に、燈すなる大文字は、弘法大師の作り給ふと云傳へたり、いかに、其運筆字勢の妙絶たる類ひなし、予彼村に往て、親しく村長に問に、第一の畫、長三十八間、第二八十五間、第三六拾間とぞ、火の數七拾五、其中央の所を、カナワといふ、さて山に登り、薪を積めるを見しに、生松の小割を以て、難此の如く、積立、枯松葉を差添て、火勢を助る、其體さながら、護摩爐に用る、壇木助刀に異ならず、思へば山上に用ゆる、柴爐護摩の根原たる、靈地なる事、炳然なり、またかの七十五の火場、皆穴にあらず、只平地なれども、絶て草木を生せず、故に焚時諸蟲殺生の患なし、又冬日の雪朝には、雪の大文字を顯はして、人目を驚歎せしむ、これら大師秘密の加持力を以て、山祇に誓ひ、後葉まで結界なし給ふならめ、されば忌服ある人を甚く憚るとぞ、もし人家に誤て用ふれば、忽ち祟りを受